

横田と嘉手納の空兵が連携、航空医療搬送で命を救う *Yokota, Kadena Airmen save life in real-world AE mission*

December 17, 2024

By Capt. Emma Quirk
374th Airlift Wing Public Affairs

10月28日、空兵のチームが迅速な対応と緊密な連携を発揮して航空医療搬送を行い、重傷を負った同僚の命を救った。この任務は、10月27日早朝、横田基地内で発生したバイク事故を受け、第374医療群と第374運用群、そして第18航空医療搬送中隊(AES)と米太平洋空軍重症患者航空搬送チーム(CCATT)の協力によって成功した。

負傷した空兵は事故直後、同僚に電話で助けを求めた。深夜、その同僚は電話を切らずに相手が意識を保ち続けるようサポートしながら現場に駆けつけ「911」に緊急通報した。横田基地の救急医療機関は直ちに医療チームを派遣し、患者を基地内の救急治療センターへ搬送した。

第374空輸航空団司令官リチャード・マックエルハニー大佐は「全員が一丸となって対応し、あらゆるスキル、リソース、選択肢、連携を駆使してチームメイトを救うために尽力した」と述べた。

横田基地の医療クリニックが患者を基地の外の病院に搬送する手配を行う中で、その空兵の容体が極めて重篤であり、命を救うにはすぐに治療を受ける必要があることが判明した。横田の医療スタッフは緊急手術を行い、一時的に集中治療室(ICU)を設立して患者の容体を安定させるよう努めた。

「ICUを即座に設置し、24時間体制で医療スタッフを配置して患者の治療にあたった。我々の能力の全てを出し切る必要があった」と第374医療群グレイ・リチャート大佐は語った。

その後、第374空輸航空団の複数のチームが連携し、負傷した空兵を嘉手納基地に搬送する航空搬送を行った。患者の容体が極めて危険な状態だったことから、嘉手納基地のCCATTが動員され、飛行中も専門的な療ケアが行われた。太平洋空軍のCCATTは高度な訓練を受けた3人構成の医療チームで、太平洋地域や本土を問わず、患者をより高度な医療施設へ搬送する任務を担っている。

一方で第374運用群は、患者を搬送する航空機の運用で重要な役割を果たした。第459空輸中隊のC-12JヒューロンがCCATTと医療器材を横田基地に搬送し、C-130Jスーパーハーキュリーズが患者と医療チームを嘉手納基地へ搬送する任務を担った。

「今回の任務では、誰一人として長時間の任務に不満を言わず、要求される役目に疑問を挟むことなく全力で対応した。横田から高度な医療を受けられる施設へ患者を輸送するために、チーム全体が日頃の訓練を活かし、率先して行動し、命を救った。これほど誇りに思うことはない」とマックエルハニー大佐は述べた。

この任務のあいだ、CCATTは横田に定期展開していた第18航空医療搬送中隊と連携を図った。同中隊は、米インド太平洋地域で唯一の航空医療搬送部隊であり、24時間体制で患者搬送をサポートしている。

「我々の最優先事項は、患者を安全にA地点からB地点に搬送することだ。ここにいる全てのスタッフが患者の命を救う上で不可欠な存在だった」と第15医療運用中隊医師および救急医療医のクリステン・ドウディ少佐は述べた。

横田基地の航空機とAESの連携により、迅速で効果的な域内搬送を実践することができた。CCATTと第18航空医療搬送中隊のチームは患者を嘉手納基地へ搬送し、その後、次段階の治療と回復のため、ハワイ州パールハーバー・ヒッカム統合基地にあるトリプラー陸軍医療センターへと航空医療搬送した。

「医療従事者の使命は、どんな状況でも人命を救うことだ。今回の任務では、関係者全員の力を結集し、短時間でどんな重篤な患者も搬送できる能力を証明した」とAES技師マイケル・ヴァンホーン軍曹は語った。



(Photos by Senior Airman Samantha White and Yasuo Osakabe)